

じす。
こうに
呂永小
ちと
スタ
いの
作を

(市)り
の
市の
仮設
で制
材は
の豪
てい
化を
てい



台湾での公演に向けて練習を重ねるメンバーら（大阪市で）

阿波おどり 台湾支援

きょう公演 被災・花蓮と入植の縁

大阪を拠点に活動する阿波おどりのグループが2日、地震と台風で甚大な被害を受けた台湾東部の花蓮県を訪れ、復興支援公演を行う。戦前の日本統治時代に徳島県から花蓮県に多くの入植者が移り住んだ縁があり、メンバーは「被災地を元気づけたい」と意気込む。

花蓮県は昨年4月の地震で、20人が死亡し、1000人以上がけがをした。今年9月の台風18号でも大規模な水害で20人以上の死者・行方不明者が出た。

花蓮県第2の都市、吉安郷には1910年代に多くの徳島県民が入植し、特に吉野川流域の出身者が多かったことから「吉野村」と命名された。吉野村は48年に吉安郷と改名されたが、吉安郷と徳島市は2019年1月に友好交流協定を締結し、交流を続けている。

復興支援公演は、吉安郷と徳島日台親善協会（徳島市）の協議で実施が決定。徳島県出身者らでつくる「南大阪連」に打診があり、安東圭介連長（55）は「徳島ゆかりの土地が被災し、心を痛めていた」と快諾。南大阪連を中心に関西阿波おどりの協会所属の四つの連から計35人が参加する。

メンバーの一人で、南大阪連の中田浩一さん（64）は、父親が少年時代を台湾で過ごした。「台湾は第2の心の故郷。災害は決して人ごとではない」と語る。

ステージでのパフォーマンスのほか、踊りながら街中を練り歩く予定だ。